

結局、生きている人間が一番怖い。

結局、生きている人間が一番怖い、ということとはよく言われる。私もその意見には大いに賛成だ。

しかしながら私は、霊的な存在を否定して、そんなことを言うわけではない。幽霊の存在を全面的に肯定し、その上で幽霊よりも生きた人間がこの世で最も怖いと主張するのである。

理由はまあ、複雑な事情があるわけだが、大きく分けて二つある。一つは、私には生きている人間に殺された経験があること。そう、私自身が幽霊なのである。

そしてもう一つの理由だが、これを今から順を追って説明しようと思う。

私が殺されたのは、親友の家からの帰り道。この親友というのが変なやつで、自分には幽霊が見えるのだといつも吹聴していた。今思えば本当にそうだったのだが、生前は全く信じていなかった。幽霊のことを言い出す以外は真面目で、嘘も吐かないやつだったので、普通に友達はいた。

その日は夜遅くまでそいつの家で飲んでいて、わりと家が近いので、人気がない道をふらふらと歩いて帰っているところだった。

後ろから走ってくる足音が聞こえ、足元のおぼつかない私のがのっそりと体ごと振り返ってみると、すぐ前に目を血走らせた中年男が迫っていた。直後、胴に衝撃を感じ視線を落とすとそこには刃が根元まで深々と私に刺さっている包丁。目を上げて再び男を見ると、彼は狂ったような笑みを浮かべながら少し後ずさりし、すぐに私に背を向けてばたばたと走り去った。状況がうまく呑み込めないでいる私はもう一度腹に刺さった包丁を見ると、やっつと、ぐう、といったような間抜けなうめき声を出してうずくまり、横に倒れた。血が流れた濡れたシャツが肌に張り付いていくのを不快に感じながらようやく痛みが襲ってきて、同時に今の状況の理不尽さがわかって

きて、裏返った声で、はあ、とどこかへ向けて怒るように声を絞り出した。何なんだこれとは思いつつももう痛みで言葉を発することもままならず、そのまま地面にも広がっていく自分の血を眺めながら次第に視界がかすれて私は死んだ。

死の間際、私は誰かの声を聞いた。

「ご臨終おめでとう」

はっとして私の方を向くと、さっきの通り魔とは別の男が私を見下ろしていた。私は立ち上がろうとして、先ほどの痛みが完全に消えていることに気づいた。

「いやあ、今のはすごかったね。いきなり刺して逃げちゃって……。

あんたも不運な人だよほんと」

またも状況を見失った私を、さらに混乱させるようなことを言いながら私の背中を叩いてくる男。結構強めに叩いているように見えるが、その衝撃は感じられなかった。

男は私の顔を見て、何かに気づいたような顔をした。

「うん？ よくわかってないみたいだね。えっと、要点だけ言うと、今さっき君はここで死んだの、俺の目の前で。実感が無いなら、下を見ればわかるよ。あんまりいい気分になるようなものじゃないけど」言われるままに下を向くと、足元には私があった。しかも、うずくまるように横たわって、腹に包丁が刺さり血塗れで死んでいる私だ。なるほど、私は死んだらしい。

死という出来事に対して抱く思いとしては、馬鹿みたいにあっけないが、本当にそう思っただけだった。考えてみれば当然で、生前私は、死というのは自分の存在の消滅だと信じていたわけだから、死んでもなお意識があり存在しているこの状況は、私にとってはまだ死んでいないようなものだったのである。だから私は、生物学上は死んだが、まだ死んではいなかった。

自分の死を認めると急に冷静になった。私は男に話を聞いて、その男が幽霊であると知った。どうも、自分も幽霊になったらしい。幽霊という誰かを恨んでいるイメージがあるが、別にそういうこと

ともないようだ。私も生きていた者として、もちろん多少は人を恨むこともあったが、誰かを呪うような怨恨はない。私を殺したあの猟奇的な通り魔は多少憎いが、私は死んだだけで消滅したわけでもないし、それほど問題はないようにも思えた。

そう、大した問題ではない。実は生前、私は死に関する想像をいろいろと巡らしていた。存在が完全に消滅するだけでも怖ろしいが、例えば、体が消滅して五感が断たれても意識だけは残って、永遠に思考することしかできない無の空間に投げ出されるのではないかと、そういつた想像だ。いやな想像ばかりしたわけではない。死の間際の一瞬に今までの人生が鮮明に思い出される走馬燈というものがあつたとして、その走馬燈のラストシーンはほかならぬその走馬燈なのだから、アキレスと亀のように永久に死は訪れないのではないかと、というような楽観的な想像もした。それと全く同じ考えが小説に書いてあるのを見つけた時には、やはり人間考えることは同じだなあと思つたものだ。

やや話が脱線したが、私が死に関して恐れていたのは、自分の意識が消えることというよりは、自分の意識は残つたまま、外界との接点がなくなることだつた。

しかしどうだろう、私は死んだが、触覚はなくなったものの、周りの景色は見えるし、音も聞こえる。生きている人間とは基本的に話せないそうだが、幽霊もこの世には案外いるようなので、話し相手に困ることもなさそう。生きていたころと違うのは、実体がなくなつて、壁をすり抜けられるようになり、食事や睡眠をしなくてもよくなったことぐらいだろう。死んで消滅するどころか、むしろ自由になつた気さえしてくる。

私は再び自分の死体を見下ろした。ううむ、なかなかひどい殺され方をしている。このあたりの道は人通りが少ないから、きつと朝になつてようやく発見されて、殺人事件だから警察がやってきて、そして何日か経つて解剖やらが終わつてから、家族のもとに死体が返され、葬式が行われるのだろう。一度、自分の葬儀を見てみたかっ

た。ぜひ参列したいものだ。

しかし、葬儀か。そうだな、突然の死だったので、親しい人物に別れを告げることもできなかった。死がそれほど深刻な通過儀礼でなかつたことは幸いだが、そのことは悔やまれる。

私の存在を相手が認識できないにしても、せめて家族と親友ぐらにはお別れを言い回つておくべきだろう。

最後(最期?)の挨拶回りをする旨を男に伝えると、男は暇だからとついでにきた。迷惑といえば迷惑だが、確かに幽霊生活は暇で、このような珍しいイベントには飢えているのだろう。多少の顰蹙を買つても関わろうとするのが道理かもしれない。その点は自分も覚悟しておくべきか。

親友宅からの帰り道ということ了近かつたので、先に親友に別れを告げに向かうことにした。そういえば彼は幽霊が見えると常々言っているな、と思ひ出したところに、彼の家についた。扉を開けられないので、すり抜ける。

そこで彼は霊が見えると言っていたと男に教えると、男は途端に顔の色を変えた。

「待て待て、幽霊が見えるって、そんな。除霊されたらどうするんだ」

そう言つて急いで引き返そうとする男。

しかし一足早く、何かを唱えながらもすごい勢いで親友が奥の部屋から出てきて男に向けて塩を投げた。私はとっさによけたが、男は背を向けていたので反応できず、もろに塩をくらつてしまい、その場で身悶えして止まってしまった。私にも少しだけ塩がかかり、それだけでも感電してしびれたようになっていたので、男の苦しみは察するに余りある。親友は男のすきをついてとどめを刺そうとしているようだったが、その時には私はわけがわからないながらも逃げ始めていたので、その後でどうなったのかは不明だ。ただ、二度とその幽霊の男に会うことはなかった。

どうやら、死んでもなお、消滅のリスクというのはあるらしい。し

かもそれを行うのは、幽霊を悪いものと決めつけて除霊する、親友のような生者たちである。私たち幽霊からすれば、除霊ができる人物かどうかの区別はつけられないのだから、生きている人間は誰がお祓いをしてきてもおかしくないことになる。まあ、生前だって、道行く人の誰が猟奇殺人鬼とも知れなかった（実際、私は刺された）わけだから、そういった点では以前と変わらないともいえよう。

しかしながら、もし実体のない私たち霊が消滅するとすれば、それは生きている人間がお祓いをしたときだけということになる。そういうわけで、死後に最も気を付けるべきは、生者なのだ。結局、生きている人間が一番怖い。